教育の病い――「嘘」の多様な意味を中心に――

吉田章宏（東京大学教育学部教授）

「教育」という言葉を、人は何気なく「教え育てる」と読み、そう理解してしまいがちです。しかし、教育は人と人との間での営みですから、「教え育てる」という以外の多様な理解が可能であることに気づきます。そのことを、たとえば、教える人としての教師と学ぶ人としての子どもの間での「教育」の営みの場合について、考えてみましょう。

この場合、教師が子どもに「教えつつ（子どもを）育てる」がまず、もっとも自然な読みと理解でしょう。

しかし、教師が子どもを「教えつつ、（自らが、教師として、また人間として）育つ」という側面も、「教育」にはあります。さらに、「教育」には、子どもが教師に「教えられつつ（自ら）育つ」という側面も、「教えられつつ（結果として、教師を）育てる」という側面もあります。

さらに、「教育」においては、教師が子どもに教えるだけではなく、子どもが……たとえ、そうした意図は無いにしても、……教師に何事かを教えるということもよくあることです。ですから、例えば、子どもが教師に「教えつつ（教師を）育てる」ことも、「教えつつ（自ら）育つ」もまた、ありうることなのです。

いや、それだけではありません。教師がある子どもを「教えつつ、（他の子どもを）育てる」という側面もあれば、教師が他の子どもを「教えるのをみつつ、（ある子どもが自ら）育つ」という側面もあり、さらに、子どもが教師に「教えられつつ、（他の子どもを）育てる」という側面もあります。

こう考えてくると、「教育」を、ただ教師が子どもを「教え育てる」こととしてのみとらえることの一面性と不十分さが際立って見えてきます。むしろ、「教育」は「共育」として、つまり、教師も子どもも、……そして子ども達も、……教える人も学ぶ人も、その営みを通して「共に育つ」こととして、とらえるべきではないでしょうか。

人はそれぞれ、それぞれの世界を生き、それぞれの世界を持ち、それぞれの世界で在る存在です（吉田章宏、1987

年、二三六ページ)。「育つ」とは、それぞれの世界が豊かになることです。教育は、それぞれの世界が豊かになり、それと同時に、それぞれの人が豊かになる営みだといえます。

「教育」が「共育」だとすれば、「教育の病い」とは、「共育の病い」であり、教師と子どもが、「教育=共育」の営みのなかで、「共に育つ」ことが出来なくなるようになることであり、阻害されることであり、教師と子どもの世界が共に病むことだ、と言えそうです。では、そうした「病い」は具体的にどんな姿をとるでしょうか。

この「病い」を生む契機の一つに、教える人と学ぶ人との間における「嘘」というものがあります。ここでは、そうした「嘘」の例を二、三、とりあげて考えてみることにしたいと思います。

教師の嘘

昔、子ども達の間で、こんな戯(ざ)れ歌が歌われていたことがあったそうです。

「お寺の和尚さん　鐘をつく／　がっこ(学校)の先生嘘をつく」

この歌が、どんな経緯で生まれて来たのか、今の私には知る術もありません。ただ、この歌に込められた思いを生んだ子どもの生きている世界としては、たとえば、つぎのような世界を想像することができましょう。

学校の先生は、教室では、怖い顔で、偉そうにしていて、私をにらんでいる。私は怒られないようにと、毎日びくびくしながらおとなしくしている。でも、心の底では、ふん、先生だって知らないこともあるさ、間違えることもあるさ、とも思っている。で、学校の帰り道に子ども達だけになると、この歌をどなるように力んで歌う。すると、不思議にも先生の威圧感から解放されて、ほっとする。そんな世界です。いえ、あるいは、そうではないかもしれません。先生は、子どもの私に優しく親しみの持てる先生です。その先生が、子どもの私に指摘されて、その間違いを正した時、恥ずかしそうにした笑顔を思い出します。そして、私の大好きなその先生への、お寺の和尚さんに対する敬愛の気持ちにも似た、心からの親しみの気持ちを込めて、私はこの歌をおどけて歌う。そんな世界であるのかもしれません。

前者のような場合なら、「先生の嘘」は私が豊かに学ぶことを妨げる毒となるかも知れませんが、後者のような場合なら、それは、むしろ先生への親愛の情を深め、私が先生から、安んじて、豊かに学ぶことを促す薬ともなることで

しょう。

もっとも、「嘘」が子どもにとって持つ意味は、大人にとってそれが持つ意味とは、だいぶ違うかもしれません。ピアジェの研究（ピアジェ、一九五五年、一七四～一九二ページ）で広く知られているように、「嘘」は、子どもが幼いときには、「悪い言葉」と同一視されている、と言います。ついで、「嘘」は「誤り」と同一視されるようになり、さらにすすんで、ついには、子どもにも「意図的な誤り」としてとらえられるようになります。「意図的な誤り」とは、真実を知りながら、敢えて他者をだます意図をもってなされる「誤り」だ、といっていいでしょう。「誤り」としての「嘘」は、内容的な嘘、対人的な意図を持たない嘘、ですが、「意図的な誤り」としての「嘘」は、多くの場合、自己の利害のために、他者を誤らせようとする意図から生まれる、「対人的な嘘」です。教師の、単純な「誤り」ではない、子どもを積極的にだます対人的意図に発する「嘘」を、子どもが見破るようになり、しかもそのことを、相手が教師であり先生であるがゆえに、黙って耐えていなければならないというような情況が生まれるとき、その「嘘」は、教師と子どもの間に不信の壁をつくり始め、ひいては、豊かな「教育=共育」に「病い」をもたらすことになります。

「わからないことは、はっきり『わからない』と言うが、次の時間には必ずそれを調べてきて、『あれはこうこうであった。O君のおかげで、一つ勉強したよ』」と言うH先生について、中学生の一人はこう語ったといいます。「……ですが、それに比べてB先生のはどこからどこまでが本当かうそかの区別がつきません。生徒が突っ込んだ質問をすると、必ずなんとかかんとか言って、ごまかしてしまうからです。H先生のおっしゃったことなら、うそかほんとかがはっきりしていて、そのまま信ずることができます」と（吉田　拡、一九六五年、一一二ページ）。

B先生の「嘘」は、初めは単純な「誤り」であったかも知れません。しかし、先生がその「誤り」についてごまかしを始めたとたん、そこには、恐らく自分の権威を保ち、無知を隠すための、「意図的な誤り」としての「嘘」が生まれ始め、「誤り」を正し、真実を豊かに学ぶことから子どもを遠ざけることになって行きます。また、子どもの先生への信頼が損なわれ始めます。そして、時には、子どもはB先生の「嘘」から、積極的にごまかすこと、意図的な「嘘」をつくことを学び始めます。そのことは、その後、子どもが真実を豊かに学ぶことを長く妨げることへと導いていくかもしれません。教師である当のB先生自身も、そうした

「嘘」で事足れりとすることで、真実を追究することを怠ることに慣れ、「嘘」でごまかすこと、子どもを見くびることを学び、そして、自らも豊かに学ぶことから次第に遠ざかることになります。子どもが、反面教師としてのＢ先生の嘘によって、「学校の先生嘘をつく」と学ぶのも、厳しい人間的現実を豊かに学ぶことの一部となりうるとも、あるいは言えば言えるかもしれません。しかし、この学びは人間不信という更に重い「教育の病い」を招く毒を含むことになるのではないでしょうか。

これに対して、仮に先のＨ先生が「誤り」としての「嘘」を教えたとしても、Ｈ先生はそのことに気づけば、その「嘘」を自ら正そうと努めます。もし子どもからその「嘘」（誤り）を指摘されれば、率直にその非を認め改めるばかりか、それを指摘した子どもに感謝しさえもするのです。子どもとの信頼関係は自然にいっそう深まります。Ｈ先生の生きている世界は、他者に対して、また真実に対して、常に自由に開かれており、次第次第に豊かになって行く世界です。子どもは真実を学ぶことをＨ先生の在り方からきわめて具体的に学びます。そうすることで、子ども達自身の世界にもまた、豊かになって行く道が聞かれていきます。先生と子どもは、教育により、共に育っていくことでしょう。

教師の「嘘」も、「教育が共育である」ことの深い理解の有無により、たいへん大きな違いを生むことになりそうです。

子どもの嘘

では、子どもがつく嘘はどうでしょうか。

子どもの「嘘」を受け止める大人の世界の豊かさが問題となります。子どもが嘘をついているのをみて、直ちに「けしからん」と威丈高になってどなりつけるのも、確かに、一つの在り方ではありましょう。しかし、その子どもがそうした嘘をつかざるを得ない世界に生きていることに気づき、ある時にはそれを「ほほえましい」ととらえ、またある時には「哀れだ」ととらえるのもまた、一つの豊かな在り方ではないでしょうか。

子どもが、身体の具合が悪いと言って、「登校拒否」をする時、「常識的で見当違いに熱心すぎる教師」などは、「とにかく子どもを学校にひきずり出そうとする」ことが多いと言います。そして、「仮病・詐病的なものなどときめつけてかかってくるものである」（河合　洋、一九八六年、一八〇ページ）とも言います。つまり、そこに直ちに子どもの「嘘」

を見てしまうわけです。しかし、仮にそれが、事実とは異なるという意味では「嘘」だとしても、その子どもがそうした「嘘」をつかないではいられない状況に追い込まれて居ることを理解することが、教師には求められるのではないでしょうか。そして、その子どもが、そのような「嘘」をつくことでなんとかして逃れようと、もがき苦しんでいる世界を生きているということ自体は、決して「嘘」ではなくて、まさに紛れもない「真実」なのではないでしょうか。それに、仮病・詐病、つまり「嘘」ときめつけられた身体症状も、今日ではすでに広く知られているように、心身症的な症状であって、意図的な計算づくの「嘘」などではない、という可能性も大きいことを忘れてはなりません。

一般に、子どもの言っていることが、「真実」である場合と「嘘」である場合とがありえます。そして、大人である私がそれを「信じる」場合と「疑う」あるいは「信じない」場合とがあります。そこで、単純に整理して、別表のように四通りの組み合わせとして表すことができましょう。

子どもが「真実」を言い、私がそれを信じる。これは幸せな出会いであり、それが「教育=共育」で望まれる正常な姿でしょう。しかし、現実には、子どもが意図的な「嘘」をつくこともあります。私はその「嘘」を「疑う」あるいは「信じない」。この時、「私はだまされない」で、子どもの「嘘」を正すことになるでしょう。子どもは、心から反省してそれ以降「嘘」をつかないようになる。これもまた、幸せな出会いと言えるでしょう。しかし、子どもと私との出会いが現実にいつもこうした幸せな出会いばかりで満たされるのはむしろ例外的かも知れません。例えば、子どもの「嘘」を信じ「私はだまされる」場合があります。後になってそのことを知り、だまされた私は子どもに怒りをぶつけることで、関係をぶち壊すかも知れません。しかし、この場合は最悪ではありません。私は子どもを不当に傷つけることにはならないという意味では、まだ救いがあるからです。この場合でも、私からみて「嘘」と思えることを、子どもは「真実」と心から信じている場合もありうるのですから、やはり慎重であること

別表

	真実	嘘
信じる ／	私は正しい	私はだまされる
疑う・信じない ／	私は傷つける（＊）	私はだまされない

は求められるでしょう。最悪の場合として恐れなければならないのは、むしろ、子どもが「真実」と信じ切っていることを、私が「嘘」と断じて、「信じない」あるいは「疑う」場合、つまり（＊）の場合です。それが子どもにとって大切な事柄であればあるほど、私は子どもを深く「傷つける」ことになります。この場合に、「教育」が損なわれることになる危険は余りにも大きい、と言わなくてはなりません。この危険とは、たった一回のこうした出来事によって、子どもの世界がすっかり変わってしまい、大人である私との間に越えがたい壁ができて、「教育=共育」が深く病むようになることです。例えば、子どもが「身体の具合が悪い」と「真実」を述べているのに、仮病を疑われ、信じてもらえず、「嘘」をついていると私に断定されてしまう場合の、子どもの心の世界に起こる激変を想像してみましょう。私は、取り返しの付かない仕方で、子どもを深く「傷つける」ことになるのではないでしょうか。

そもそも、私にとって「だまされぬ」ことはそれほどまでに大切なことなのでしょうか。子どもに「だまされる」ことを、私は何故そんなにも恐れなくてはならないのでしょうか。それよりも、子どもの訴えが「真実」である時、それを信じないことで子どもを絶望に追いやるという恐ろしい出来事を防ぐことのほうが、ずっと大切なことではないでしょうか。仮に、子どもの訴えが「嘘」であったとしても、その「嘘」によって子どもが訴えたいことは何なのか、「嘘」をつかないではいられないその子どもの世界とは、どのような世界なのか、子どもが「嘘」をついてまでも守ろうとしていることは一体何なのか、そうしたことに私はもっと心を向けなくてはならないのではないでしょうか。私は子どもと共に、どのような関係を生きようとしているのでしょうか。私は子どもにだまされやすくお人よしであることも、時には大事ではないでしょうか。信じ切る人であろうとするとき、私には、高い知性の一つの証（あかし）である、「曖昧性への耐性」が必要とされます。性急な思い込みで断定してしまわない慎重さが必要とされます。子どもの一つひとつの行為の、多様な意味の可能性への洞察を持つことが求められるのです。それは、基本的には、「個々の人間は無限で汲み尽くすことができない」（ヤスパース、K）からです。たとえ、だまされてもなお、子どもと「共に育つ」ことのできる関係を大切に保つことができる、そういう、ゆったりとした余裕、視野の広さ、寛容さ、謙虚さと賢さが必要なのではないでしょうか。

以上は、もちろん、いつもだまされる愚かさが最善、と

説くものでは決してありません。だまされないだけの頭のよさ、抜け目の無さを子どもに思い知らせることに汲々とするよりも、私が子どもを信じ、子どもが私に信じられていると信じることのできる関係をつくることを目標として努めることのほうが、「教育=共育」にはよほど大切なことではないかとの思いを述べたものです。

言うまでもなく、子どもも巧みに「嘘」をつくことがあります。例えば、小説『少年死刑囚』につぎのような一節があります。

「『宿題をやってきたか』

先生から聞かれる度に、私は必ず『はい』と答へた。すこしでも不安な表情をしたり、あわてた様子をみせたりしては、嘘を見破られると思って、私はきはめて自然に、先生の前でにこにこ笑ってみせた。

私はそんな芝居をつづけてゐる間に、嘘を嘘でないと信じてゐれば、他人は看破できるものではない、といふ事を悟るやうになった。そして不思議なことにはその後、私には嘘と真実の境がしだいに不分明なものになってきてしまった。」（中山義秀、一九五四年、九ページ、仮名遣いまま）。

確かに「嘘は泥棒の始まり」なのかもしれません。

従って、「嘘」をついた子ども自身が、素直に認められるように、心から納得するようなかたちで明らかにして、反省を厳しく求めることが大切な場合もあるでしょう。しかし、そうした「嘘」が「嘘」であったと、子ども自身から進んで告白しに来るようになる信頼関係を築くことは、よりいっそう困難だとはいえ、さらに望ましいことではないでしょうか。そして更にまた、そのような「嘘」をつく必要が全く無いような人間関係の成り立つ世界を生きることは、もっと大切だという」とにはならないでしょうか。「嘘」なしに「共に育つ」ことのできる場を創る大切さを思うのです。

教育が共育であるとすれば、「教育の病い」とは、「共に育つ」ことが病むことです。教師の「嘘」も子どもの「嘘」も、そうした病いの源の一つとなりうるものです。「教育」における「嘘」の多様な意味と、それをどのように受け止めるか、このことは健康な教育を育て、教育の病いを防ぎ癒すために、ぜひ考えておかなくてはならないことではないでしょうか。

〔引用文献〕
河合　洋著『学校に背を向ける子ども』ＮＨＫブックス、一九八六年。

中山義秀箸『少年死刑囚』角川文庫、一九五四年。
ピアジェ、J著、大伴茂訳『児童道徳判断の発達』同文書院、一九五五年。
古田　拡箸『教師の話術』共文社、一九六五年（第一〇版）
吉田章宏著『学ぶ　と　教える……授業の現象学への道』海鳴社、一九八七年。
「教育と医学」一九八八年四月号、八六–九二頁

（注）この文章は、二〇一四年一一月発信の e-mai二 の添付ファイルとして、『教育と医学』編集部から提供された WORD テキストの元原稿を、当方で、新たに校正し編集し直して、ここに掲載させていただきました。今回、本ホームページでの掲載を承認してくださったご好意に、また、元原稿探索あるいは復元、そしてその提供など、種々の便宜をお図りくださった同編集部のご好意に、深謝いたします。

著者・吉田章宏